

京都大学	博士（文学）	氏名	松村 良祐
論文題目	自己愛と他者愛の関係 —トマス・アクィナスにおける「愛の問題」の一側面—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、トマス・アクィナスの愛についての思想を、自己愛と他者愛（隣人愛）の関係を軸に考察した論文である。その考察は、問題を提起する序章と考察の結論を提示する終章のほかに、愛の基本的構造を扱う第一部と、自己愛と他者愛の関係を扱う第二部からなる。各部はいずれも三章立てで構成されている。全八章の議論を通して、トマスが自己愛の優位性と範型性を主張していること、自己愛と他者愛は両立すると考えており、自己愛を完成するものとして他者愛を位置づけていることを明らかにしている。</p> <p>第一部と第二部を構成する各章の内容は以下の通りである。</p> <p>第一章では、『神学大全』のいわゆる「情念論」に基づいて、トマスが、愛という情念をどのようなものとして位置づけているかを明らかにしている。また、愛をトマスがどのように記述しているかを分析し、その哲学的含意を考察している。魂が被る情念・受動（passio）は、欲求が欲求対象を原因として生じ、欲求対象へと向かうという円環運動の内に捉えられている。愛は、欲求対象を目指す欲求の「運動の始点・根源」にあたるものとして位置づけられている。トマスは、情念としての愛を記述するにあたり、「傾向性（inclinatio）」「適合性（convenientia）」「親和性（connaturalitas）」「好感・喜び（complacentia）」等、様々な語を用いているが、論者はとりわけ「好感・喜び」という語に注目している。あるものが「自身に適合する善」として捉えられると、欲求能力は「好感・喜び」を抱き、そのものへと自ら向かっていこうとする。「好感・喜び」という語のもとで、欲求対象の働きかけを起源としつつも、欲求対象へと自発的に向かっていく、動的な愛の姿が照らしだされていると論者は分析している。</p> <p>第二章では、自然本性的な愛と感覚的・知性的な愛の対比を通して、トマスが語る愛の本質的な要素を明らかにしている。トマスは、事物がもつ自然本性的な傾向性（例えば、重いものがもつ下方に向かう傾向性）を「自然本性的な愛」と呼んでいる。自然本性的な愛と感覚的・知性的な愛のいずれにおいても、愛は運動の始点・根源であると理解される。愛の原因は認識にあるとトマスは主張する。感覚的な愛と知性的な愛の場合、愛の原因となる認識は愛する者自身の内で生じるが、自然本性的な愛の場合には愛する者自身の外（神の内）で生じる。すべてのものを認識する神が、各々のものに特定の自然本性的な愛（傾向性）をもつ形相を与えている。トマスは、本来の意味での愛は、愛の原因となる認識が愛する者自身の内にあることを要求す</p>			

ると考えている。したがって、自然本性的な愛は広義での愛であり、愛する者自身の認識に基づいて生じる感覚的な愛と知性的な愛が本来的な意味での愛である。

第三章では、感覚的な愛と理性的・知性的な愛を対比的に論じたテキストをとりあげることによって、愛の働きを担う欲求能力についてのトマスの捉え方の重層性を明らかにしている。『真理論』第二十二問第四項と『神学大全』第一部第八十問第二項は、共に感覚的欲求能力と理性的・知性的欲求能力との相違を主題としているが、トマスは、この二種類の欲求能力の違いについて異なる視点から説明を行っている。『真理論』では、欲求能力そのものの働きに焦点をあてた考察をしている。感覚的欲求能力と理性的欲求能力は「傾きを他のものによって決定されたもの」と「傾きを自ら決定するもの」として区別されている。感覚的欲求能力は、神によって定められた自然本能の傾きに基づいて、感覚によって捉えられた対象に対して機械的に反応するにすぎない。それに対して理性的欲求能力においては、認識能力によって捉えられた対象へと傾くか否かを決定するのは自分自身である。こうした考察は、欲求能力を自発性の有無という観点から記述するものであり、欲求する対象を選択する自由をもつ理性的欲求の姿を浮かびあがらせている。他方『神学大全』では、欲求能力に働きかける「認識された対象」から欲求能力が考察されている。感覚的欲求能力が、感覚によって捉えられた個的なものへ向かう能力とされるのに対し、知性的欲求能力は、知性によって捉えられた普遍的なもの（ラチオ）を有する個的なものへ向かう能力とされる。こうした考察は、欲求能力の働きを認識の働きとの連続性を通して捉えるものであって、普遍的な志向を保持しつつも個的なものへ向かう知性的欲求の姿を描き出している。

第二部のはじめにあたる第四章では、「欲望の愛」と「友愛の愛」との区別を通して、自己愛と他者愛の関係についてのトマスの基本的な立場を明らかにしている。トマスに先行するアルベルトゥス・マグヌスは、「欲望の愛」を自己に向けられる愛として、「友愛の愛」を他者に向けられる愛として区別していた。それに対してトマスは、欲望の愛と友愛の愛のいずれもが自己愛と他者愛に関わると考えている。アリストテレスの言葉にしたがい、トマスは、愛することを「或る者のために善を欲すること」としてしている。そして「或る者」に向かう愛が「友愛の愛」であり、「善」に向かう愛が「欲望の愛」と定義し、「或る者」は自分でも他人でもありうる」と解釈している。愛によって欲される善は自分のための善ばかりでなく、他人のための善でもありうるから、欲望の愛はいわゆる自己愛と他者愛の双方に関わる。またトマスは、本来の意味での友愛は自分自身に関わるものではないとしながらも、アリストテレス同様、友愛は他者に対してだけでなく自己に対しても成立すると考えている。そして、他者に対する友愛を「もう一人の自分」に対する友愛と捉えている。トマスはさらに友愛の特質を合一に見ている。他者に対する友愛、つまり自己と他者との合一は、各人が自分自身に対してもつ一性、つまり自己に対する友愛に基づいて

生じる。自己と他者が一致するとか一致しないといったことは、自己が自己と一致するという自己同一性と対比することではじめて考えることができるからである。したがって、自己愛と他者愛の関係についてのトマスの基本的な立場は「自己愛から他者愛への派生」であるとまとめられる。

第五章では、トマスの「脱我 (extasis)」についての記述をもとに、他者愛についてのトマスの考え方の多面性を明らかにしている。トマスは、脱我は「自らの外に置かれる」時に生じると述べている。さらに、友愛の愛が脱我を端的な仕方で作りに出すのに対し、欲望の愛は限定的な仕方で作りに出すと主張している。なぜなら、欲望の愛は、自己の外にある善を求める限りにおいては自己の外に出て行くのだが、その善を所有することを求めるのは自分自身のためなので、愛の終局が自分自身のもとにあると言えるからである。友人のために友人を気遣ったり配慮したりするという友愛の愛が生じさせる脱我においては、愛の終局は自己の外に存在する他者にある。しかし、自分の外へと行き着く脱我的な愛は自己放棄的な愛ではない。トマスはこうした愛においても、自分以上に他者を愛しているのではないと主張している。

第六章では、自己と他者との対立や自己愛と他者愛との両立の原因を、トマスが、自己愛に先立つ自己認識に求めていると解釈されている。人間がもつ自己愛の正しさは、自己の主要なものを正しく捉える自己認識の正しさに基づいている。理性的本性を自己の主要なものと認識して愛するのが真の自己愛であって、感性的本性を自己の主要なものと認識するならば、誤った自己愛をもつことになる。感性的・物質的な善をめぐる他者と争い、自己の利益を追求するような自己愛者は、自己の本性を感性的なものとして誤解しているのであり、真に自分を愛しているのではない。理性的本性に基づくならば、他者愛という精神的善は、自己が希求する「最大の善」として捉えられる。したがって、トマスによれば、他者愛は自己愛の完成として位置づけられるのである。

(論文審査の結果の要旨)

ギリシア思想における愛概念とキリスト教の愛概念、自己中心的な愛と他者中心的な愛の関係の問題は、ニーグレンの古典的な愛研究（『アガペーとエロース』）によって提起されたことでもよく知られている。ニーグレンは、ギリシア思想の愛概念とキリスト教の愛概念は根本的に相容れず、前者は自己中心的な愛を支持し、後者は他者中心的な愛を支持する、と主張したが、果たしてそうであろうか。本論文は、西洋思想において古典的と言える、こうした重要な問題を、トマス・アキナスに焦点を絞って論じた研究である。論者は、トマス・アキナスのものだけではなく西洋中世の愛概念についての先行研究に目を通し、その不備を補いつつ、トマス・アキナスの愛概念の特質と西洋思想史上の位置づけを明確にしようと試みている。

その主要な成果は、第一に、著作年代やジャンルが異なるトマスのテキストから、愛概念に関係する重要部分を網羅的に取りあげて分析することで、様々な視点からの考察を含むトマスの愛概念の重層性と多面性を明らかにしていることにある。トマスは『神学大全』で、愛する対象を求めるという人間の行為の出発点に愛を位置づけるだけではなく、認識に基づいて生じるものとして愛を位置づけている。さらに、愛するものと愛する対象との間に見られる適合性や親和性、合一といった形而上学的視点からも愛を分析している。『神学大全』に加えて、初期著作の『命題集註解』や『真理論』、ギリシア哲学の影響が濃い『（擬ディオニュシオスの）神名論註解』や『（アリストテレスの）ニコマコス倫理学註解』での愛の分析を取りあげることで、トマスの愛概念の多面性を明るみに出している。

第二に、上述の点と重なるが、先行研究において不十分であった、トマスの愛概念のプラトン主義的側面に光をあてていることが特筆される。アウグスティヌスの影響が強い『真理論』での欲求能力の記述を考察することで、人間に固有な愛の自発性・自己決定性を浮かびあがらせている。また、自己愛と他者愛についてのトマスの形而上学的分析をとりあげることで、他者愛が合一と捉えられ、他者愛の根源となる自己愛が一性と捉えられていることを指摘している。さらに、擬ディオニュシオスの影響が強い「脱我」の概念をとりあげることで、自己超越的な愛の姿を明るみに出している。

第三に、こうしたプラトン主義的な愛概念が、アリストテレス的な愛概念とどのように統合されているのかを明らかにしようと試みている点が評価できる。論者は、トマスが異なる視点から行っている、愛や愛を担う欲求能力についての記述を、矛盾することなく調和するものとして解釈しようと試み、少なくとも部分的にはそれに成功している。

各章で提示されている著者の解釈、とりわけ正反対にも見えるトマスの異なる記述—それらの記述には、トマスの思想に内在するアリストテレス的・経験主義的な側面とプラトン主義的な側面が関係している—を整合的に理解しようとして提出された諸解釈の部分については批判の余地がないわけではない。しかし、「アリストテレス

（主義）とプラトン（主義）の思想は果たして合致しうるのか、合致するとすればどのような仕方によってか」というのは、古代末期から中世の思想家たちを悩ませてきた、重要かつ困難な問題である。著者が、トマスの愛概念において、この問題の核となる概念や議論を丁寧に分析し、合致の可能性を示唆していることは評価に値する。

上述した解釈上の問題のほかにも、本論文には残された課題がある。

第一の課題は、他者愛の内容を、隣人愛だけではなく、神への愛まで拡大した考察を行うことである。人間同士の愛に対象を絞った考察は、広く哲学的関心をひくものであるが、中世の愛概念の核にあるのはむしろ神への愛であると言えよう。「他者」の及ぶ範囲を「人間」から「神」へと拡大したとき、本論文で結論づけられたような自己愛と他者愛の関係は果たしてあてはまるのか、という問題の探求が望まれる。

第二の課題は、トマス以外の思想家の愛概念との比較によって、トマスの愛概念の独創性を明らかにすることである。論者は、トマス以外にはアルベルトゥス・マグヌスの愛の概念を部分的に考察している。また、トマスの愛概念の形成にあたっては、アリストテレスや擬ディオニュシオス以外の影響もあることを先行研究によって指摘している。しかし、アウグスティヌス、ベルナルドやサン＝ヴィクトル学派等の十二世紀の愛概念の影響について具体的な考察はなされていない。また、トマスと同時代のボナヴェントゥラらフランシスコ会士の愛概念との比較はなされていない。研究対象を拡散することなく、トマスに焦点をあてて、トマスのテキストから読みとられる、トマスの愛についての思索を明らかにしようという論者の着実な姿勢は好感をもてるものであるが、今後、本研究を土台とした研究の進展が望まれる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和元年九月三十日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。